

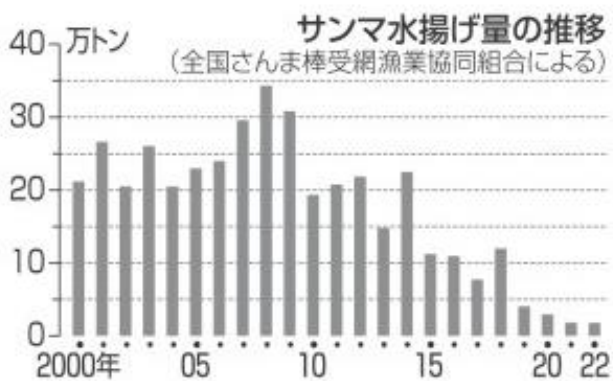
サンマ不漁 4年連続最低

22年水揚げ量1.7万ト 卸価格高止まり

全国さんま棒受網漁業協同組合（東京）は10日、2022年の全国のサンマ水揚げ量が前年比2・1%減の1万7910トだったと発表した。記録的な不漁が続き、4年連続で過去最低を更新した。10年前の12年

（21万8371ト）と比べ、わずかに約8%の低水準に落ち込んだ。卸価格も高止まりし、「秋の味覚」として親しまれてきたサンマが食卓から遠のいた状況が続いている。

全国平均で10キロ当たり5758円と前年比7・2%下がったが、18年と比較すると約3倍の高値となった。総水揚げ額は9・1%減の103億1179万円で、200億円を超えていた18年からおよそ半減した。



日本のサンマ漁 主な漁期は8〜12月。集

魚灯で群れをおびき寄せ、長い棒に取り付けた網に誘い込む「棒受け網漁」が主流。サンマは回遊魚で、北太平洋の公海で成長して日本近海に南下する。これに合わせて千葉県以北の太平洋を漁場としてきたが、近年来遊は激減した。水揚げの回復に向け、国際会議で漁獲枠を導入するなど資源管理を強化している。



大型船から水揚げされるサンマ。2022年8月、北海道根室市

22年はロシアの排他的経済水域（EEZ）での操業を断念した。ロシアのウクライナ侵攻に伴う経済制裁で、送金といった入漁手続きが長引いたためだ。全さんま組合の大石浩平専務理事は「ロシアのEEZ内にどれだけサンマが来遊していたか分からないが、漁が

できていけば水揚げ量は21年を上回っていたかもしれない」と肩を落とした。22年の漁港別の水揚げ量は、最も多い花咲（北海道）が9564トで前年比8・7%減った。本州ではやや持ち直したところが多く、2位の大船渡（岩手県）が23・6%増の3054ト、

3位の気仙沼（宮城県）は1・9%増の2266トだった。不漁の要因としては、地球温暖化に伴い日本近海の海水温が上昇したことで冷たい水を好むサンマの来遊量が減少したことや、外国漁船による漁獲量の増加が指摘されている。

① 「秋の味覚」サンマの不漁が続いています。空欄を埋めましょう

全国さんま棒受網漁業協同組合によると、2022年の全国のサンマ水揚げ量は前年比 %減の トンで、
年連続で過去最低を更新した。10年前の2012年と比べると、約 %の低水準に落ち込んだ

② 不漁の要因として何が考えられますか。2つ挙げましょう

-
-

③ ロシアの排他的経済水域（EEZ）での操業を断念した理由は何ですか